



龍造寺八幡神社に残る、義祭同盟の連名帳。年毎の楠公祭の参列者名が一望できる。若き日の江藤新平(又蔵)や大隈重信(八太郎)、島義勇(回右衛門)らの名が、墨も黒々と踊る(龍造寺八幡神社蔵)

近代日本の礎を築いた 9人の賢人。 俊英集いし義祭同盟。

近代社会のあらゆる基盤整備が行われた、幕末～明治維新期の日本。維新とは、永き鎖国と封建社会に終わりを告げ、日本という国を根底から改革する国家プロジェクトだった。そんな、新国家建設に大きな足跡を残した、佐賀の9人の賢人たちがいる。彼らのうち6人が参加し、ひたむきな議論をぶつけあった場所が佐賀市中心街にある楠神社だった。



明治維新に活躍した佐賀の9人の賢人たち。義祭同盟を結成した枝吉自身はコレラによって明治維新前には亡くなってしまいが、その門下生たちは明治新政府で活躍し、枝吉を生理の師と仰いで、理想に燃えて突っ走った。

義祭同盟とは

義祭同盟とは弘道館の教諭であり、国学者であった枝吉神陽が1850年(嘉永3年)に設立した勤王結社で、これはペリー来航の3年前のことだった。表向きは楠公父子像を祀る崇敬の集いだったが、実際は尊王論を広げ天下国家の行く末を語りあう塾の趣を帯びていた。毎年旧暦5月25日には親や兄弟姉妹にも秘密にし、佐賀鍋島藩の若き志士たちが集い、祭礼の後は無礼講で議論を深めた。

八幡神社に残された「義祭同盟連名帳」によると、初期メンバーには、枝吉次郎(副島種臣)、島回右衛門(島義勇)、大木幡六(大木喬任)らの名前があり、後に江藤又蔵(江藤新平)や大隈八太郎(大隈重信)らも参加している。他にも佐賀藩の家老であった鍋島安房(あわ)や、後に岩倉使節団に同行する久米邦武らの名前も残り、その総数は350人に及び。その参加者には幕末維新期の中央政府で活躍した人物も多く、この結社が日本の近代化に於いて果たした役割は大きい。後に二度の総理大臣を務めた大隈重信は「予がこれに加盟したのは、世に出て志を立てるきっかけになったと言ってもよい」と回顧している。



楠神社の隣には義祭同盟の碑が建立。現代でも毎年5月25日前後の日曜日には楠正成・正行親子を讃える「楠公祭」が行われる